

家族の就寝形態の研究

— 時系列的変化の分析 —

飯長喜一郎 (赤松の水好大学)

○ 篠田有子 (家庭教育研究所)

中野由美子 (家庭教育研究所)

< 調査の目的 >

日本における、6才未満の乳幼児をもつ家族の就寝形態について、学問的興味を促かせるべく、文化人類学者のプラートである。彼が、心理学者の W. コーフィールドと共に、1866年の「わが国に於ける寝か」という論文の中で、日本の親子共寝の習慣の中に、文化的に暗然とせしませる存在を指摘して、少くともアメリカの親子別寝の文化とを違いを気づかせた。この日経連府が5年毎に行う「住宅統計調査」には、6才未満の子は世帯人数に入るといふ。これに親子同寝は、日本では当然と考へられる。

さらに、「親子の接触を因する日米比較調査」を行つたわけには、この人生のうち3分の1を占める睡眠時における共寝の現象を、親と子のあいだに愛と信頼と云ふより、無意識に無言のうちにコミュニケーションの型として地を、乳幼児期(0~4才)の子をもつ家族の就寝形態の実際を調査し、変遷を分析する。そこには、就寝形態が、何らかの家族間の精神的結び付きの反映であるという前提があるが、早急に両者の因果関係を求めることを目的とはしていない。

< 調査の内容と方法 >

調査実施日は、昭和59年6月25~28日、調査対象は、神奈川県厚木にある家庭教育研究所に送り子どもたちの母親75名余り、うち

り、有効70名である。

就寝の寝方に影響を及ぼす変数として、コーフィールドは、地域、世帯員数、世代数、生活スタイル、社会階級、密度(世帯員数と部屋数との比)の6項目をあげたが、今回はこれらの上の6項目から変数としてとらえられたのは、世帯員数と密度のみであり、さらに、子どもの成長と子ども数の増加にもなつて、家族の就寝形態がどのように変化していくかに注目した。したがって結婚年月からはじめて、第一子、第二子誕生時、また部屋数についても、転居の数だけ内取り図を書いた。さらに、わかれの南は家族員相互の密着度を知らしめておいたから、あらかじめ書き込んでおいた表の内取り図の上には、ふとんあひはべードの配置や頭の方角までくわして画釋によって尋ねた。またこの際、家族の寝方について、實際の寝かせ方、御主人の睡眠時間、寝方の季節的変化ととも、具体的なエピソードを語りことにより、夫婦の生活と子ども観等へ意識面を探った。

< 調査の結果 >

1. 対象者の属性

平均年齢; 父親・35才、母親・29才
研究所の送り子ども・3才

学歴;	大学以上	高卒、高専、短大	無記入
父親	39人(56)	20人(29)	7人(10)
母親	18人(28)	43人(61)	7人(10)

カッコはパーセント

職業; 父親の有職率100%で、会社員と公務員とが、91%を占める。(無記入)
 母親の有職率3%で、専業主婦とパートの会社員である。(無記入)
 結婚年齢; 4~18年、平均6.90年

2. 世帯員数

3人世帯...13戸(19%) 4人世帯...51戸(73%)
 (5人世帯...3, 6人世帯...3) → 55 核家族世帯
 (5人世帯の1戸のみ、4人以下の分析対象には不可)

3. 住居の種類と密度

持ち家は、43戸(61%) [1戸建...23
 高層ビル...20]

木造: 19戸(27%)
 洋造: 8戸(11%)

密度は、台所、洗面所、トイレ、風呂場、ホール、廊下、店舗などを除く。寝るために使おうと思えば使える部屋の数に對する世帯員数之比を有効空間密度(available-space density)とし、実際に使用している部屋に對しての世帯員数之比を使用密度(use density)とする。

	3人世帯	4人世帯	平均
有効空間密度	0.97	0.79	0.88
使用密度	0.41	0.38	0.39

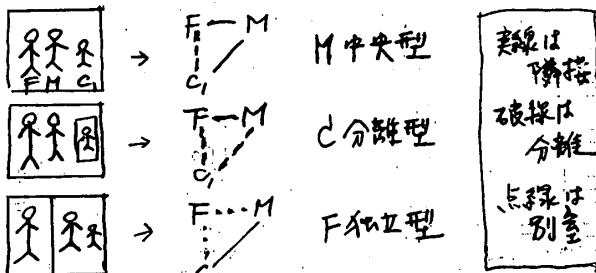
(調査時、世帯の平均年齢37歳; 別表5)

4. 就寝形態の分類

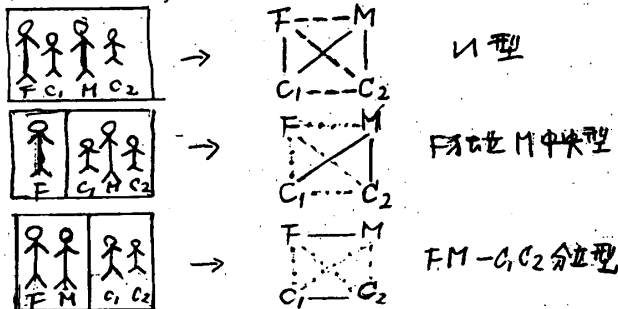
市町村単位、家族が同居に寝るあるいは隣隣に2寝るといふ行動を通して、お互いの愛着(アタッチメント)を深めるといふ傾向から、その接触度と違い、即ち隣り合っているか、離れているのかを区別する分類法が必要であった。先に2世帯、家族関係を複数の2者関係に分解し、次に個々の2者関係について就寝時の位置関係をコードにし、それらのコードの組合せにより分類した。対象となる人家族、4人家族の場合、家族関係は構成する2者関係の数は、3つの6つ

ある。以下、左のしる分類法は図で示すが(別図)、説明のためには次のような名称を使う。同居就寝の母親が中央にある場合、M中央型同居であるが、子はベッドである。C分離型同居のしる字は、C中央型。

父親が別室に寝る場合、F独立型



子どもの2人の4人家族のみられ、夫婦の間に子どもが寝、乳児は次子が母親の側に寝る型は、隣接2者関係のコードがM型に存在することからM型就寝と呼び、以下に示す。



- 子どもの成長と就寝形態の変化(別図)
 - 子どもの数の増加と就寝形態の変化(別図)
 - 就寝形態と乳幼児期の家族関係(別図)
- <今後の課題>

母親の有職率からみて、今回の対象者は専業主婦的であったとしても、その中でも圧倒的に多い、母子密着(M中央)、親子密着(C中央)は、乳幼児期における日本の親子象をなし、土井氏のいう「甘え」の子精神構造の文字通りの温床を証明している。親離れ子離れは必要とされる昨今に於いて、日本人の自立の動きを見通せるように、今後は、調査対象に中学生をいれる母親へと広げていきたい。